

〈新出資料〉東京大学でのフェノロサ「美術」講義 (1886年、松本源太郎筆記)

—— 近代日本のジョン・ラスキン受容史の視点から

三木 はるか (日本女子大学)

1878年、東京大学の招聘を受けて来日したアーネスト・フェノロサ(1853~1908)は、1886年7月まで同大学で教え、翌年、東京美術学校雇となる。東大での政治学、哲学等の講義と美校での美学の講義については、その内容が明らかにされてきた。一方、東大での美学、美術に関する講義については、これまでその内容は知られていない。

2022年7月、「松本家文書」(越前市教育委員会文化課市史編さん室寄託)に遺されていた講義ノートの中に、フェノロサの東大での「美術(Art)」講義の記録が見つかった。この英文の講義録を記したのは、近代日本の教育者・松本源太郎(1859~1925)である。松本は、越前本多家の家老・松本晩翠の下に生まれ、東京大学哲学科撰科に学んだ後、第一高等中学校で夏目金之助(漱石)らを教えた。1890年1月から2年間オックスフォード大学に遊学し、『哲学雑誌』に「ラスキンの美術論」(全8回、1894~1895年)を連載する。19世紀イギリスの美術批評家・社会思想家ジョン・ラスキン(1819~1900)の美術論をきわめて詳細かつ的確に紹介した、日本のラスキン受容史上、特筆すべき人物である。

この松本の筆記ノートには「1886.6.25」の日付が入っていることから、フェノロサが東大(正確には改称後の帝国大学)を離れる直前の講義録であることがわかる。またその内容から「道義学及審美学」の講義録である可能性が高い。この4年後、1890年に美校の美学講義でフェノロサが重点的に講じたのは、ラスキン著『近代画家論』第1巻(初版1843年)の「美術が伝えうる観念の性質について」に論じられた美術の定義であった(拙論「アーネスト・フェノロサ「美学」講義(1890年)——近代日本のジョン・ラスキン受容史の視点から」『美術史』第192冊)。フェノロサが来日前に学んだハーヴァード大学は、アメリカでの最初期の美術史学教授にしてアメリカ版ラスキン全集の編者チャールズ・エリオット・ノートンが教えた、ラスキンの美術教育の牙城であった。このノートンの推薦により、フェノロサは東大に赴任する(同192冊)。

松本の英文講義録にラスキンの名は登場しない。だが、この東大での「美術」講義には、美校の美学講義でのラスキン論との重複があり、さらに1882年の『美術真説』での十格の議論との重複もある。本発表では、松本の筆記ノートに基づき、第一に「美術」講義の内容を詳らかにし、第二に同講義にも影響を与えたと考えられるラスキンの美術論、なかでもオックスフォード大学初代スレイド美術教授としてのラスキンの同大学での講義録『美術講義(Lectures on Art)』(初版1870年)との比較を試みる。それによって、フェノロサが近代日本に紹介したラスキンの美術論の全容が浮かび上がる可能性がある。